

広島原爆被害樹のすがた

志方

益三

水爆実験の結果、日本も放射まぐろの問題で、国民はその影響を感じたが、そのごさらに、放射雨の問題で、身近かくその被害問題を感じないわけにゆかなくなつた。

西脇安教授の意見によれば、雨水毎リツトル毎分八一〇カウントを安全性の限界という。この限界については、日本の学界としては、未だ必ずしも意見は一致しておらないようなので、専門でない私は判断はできないし、徒らに過敏になるのは考え物だと思ふが、天水に依存する燈台守から、実際の被害患者が出て見れば、無条件な楽観論も、無理であろう。

平和記念館近くの竹

私は、約三十五年前に広島に住んでいたことがあり、昭和十四年ころにも、泉邸（縮景園）の隣りの、住んでいた家を訪問したことがある。したがって、泉邸のそのころの状態は、相当、記憶している。

つもりだ。満洲生活十二年ののち昨年十月帰国した。今回五月中旬、広島大学に講演に行き、理学部の品川睦明教授、今井日出夫助教授のご案内で、原爆被害の跡を見た。きわめて短時間で、爆心近い産業奨励館と、建設中の平和記念館と、泉邸を訪問したが、被爆木の現状を保存したく写真にとつた。

第一回は、平和記念館附近に移植した竹であるが、十年すぎた今日でも、幹の爆心方向は変色しており、これをささぎつたと思われる竹枝と竹葉は、明かにその影をとどめている。写真の最下節がそれである。どこから移植したか、調べてもらうようにお願しているが、一本の枝、一枚の竹葉が、幹の表面を放射線や熱線から保護したことは驚くべきことである。東京で聞いた話によると、広島原爆被害者の一人に、黒い洋服の下に白い半袖のシャツを着ていた人が、今日でも白シャツの保護作用の跡を残している例を見たことだ。

僅か一葉の緑色の竹葉が、これほど、遮断作用を示したことは、驚記すべきことだ。

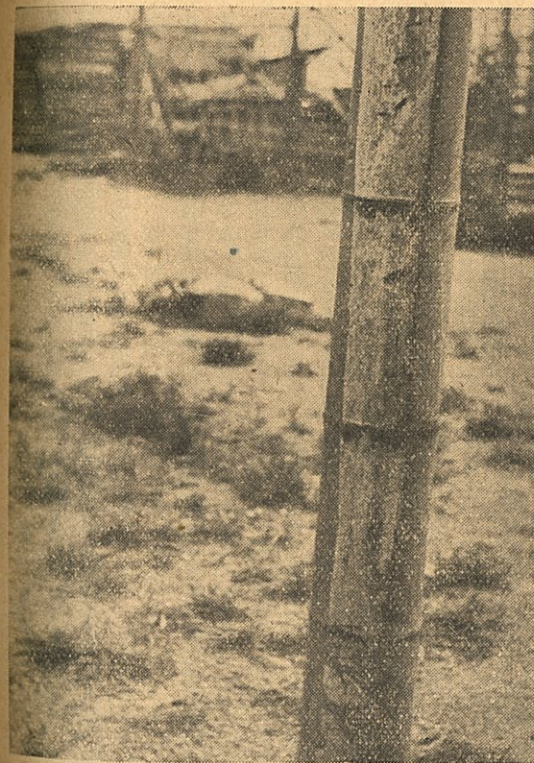
も遺伝性のものでないようだ。無理に繁殖すれば、竹の成長期に、一方の主風が強く順風方向に葉が排列したのかとも思われるが、葉軸はかんたんによじれなことも思ふが、この老松を見て塩原の片葉の音を思い出した。

くわしい調査は、何れも専門家の調査にまかせるとして、現状から推論すれば、この老松は地上火の被害少く、放射線の被害（泉邸附近で死んだ人も少くないよし）もあると思ふが、主要な被害は、爆風の機械的破壊によるものであろう。この辺は、火球半径一六〇〇メートル内外だから、気象学の専門家は温度がどのくらい、また、風速も推算できると思ふが、とにかく、この老松の、瞬間的だろうが、受けた風速は颶風の比では無かつたろう。爆心から二〇〇〇メートル離



泉邸の松。爆心のほうに向けた枝は失われ、反対側の枝は残っている。

とでなからうか。
泉邸に残った松
第二回は、泉邸に残存した松である。被害の判定については、大別すれば、原爆の直接の被害と、そのごにおける地上の火災による火傷とに分けて考える必要がある。



平和記念館附近の孟宗竹。幹の表皮に竹葉や竹枝の影をとどめている。影の部分は陰影色。

れた、御幸橋の石の欄干は倒されたというから、この老松の幹の受けた総風圧は数十トンに及ぶと思ふが、よくも折れずに、今日まで生を全うしたものと思ふ。現在は放射能は如何なものだろうか。植物にたいする放射能の課題の実例の一つでないだろうか。

被爆樹は保護したい

世界の原爆一号の地・広島も、すでに満九年をへているが、放射能雨が問題となる、今日当地方に残る樹木の被害を、専門家調べていただきたいが、少くとも、現存の被爆樹は保護してもらいたい。

日本の森林は、たんに工業資源とのみ考えるべきでない。耕地をあまりに山頂まで拡張したら、土砂は流れ、農地は荒廃する。東畑博士はピラミッド式の農地と棚田を評しているが、これにも限度がある。森林を荒廃させた米国の失敗を繰り返さないようにしたいものだ。

一面、林産物の総合的利用を研究すると同時に、国土保安、民族保健の立場で、その存在をより高く評価せねばならぬ。

被爆前には、縮景園と道路をへだてた前通りの東南の一角には、百年生程度と思われる松林があつたようだが、これは現在無い。園内の猿猴川沿いの築山には、二十本以上の老松があつたように記憶するが、現在は庭園内には四十五本、ことに池の北東部に残っている。この残つている老松は、地上火災による被害も

天寿を全うさせる

今回広島を訪問して聞いたところによれば、被爆当時は、それほど、原爆による障害を感じなかつた人が、満七年すぎで、不詳な原因で、二三日の病臥で死んだ例が一―二例に止らないという。浅田善一氏の樹木の寿命無限論を讀むと、植物と動物との寿命については、根本的にその差異を主張しておられるが、原爆のあと、障害を全然考慮外においてよいかどうかについては、未だ林学界としても、定説は無いと思ふ。

泉邸の被爆老松も、こんご百年、二百年の寿を保つとすれば、えがたい原爆記念物であろう。また、こんご何年かのちに、原因不詳で突然枯死すれば、林学上、放射学上、面白い実験材料である。

おそらく広島市内には、泉邸のほかにも原爆被害樹は少なくないと思ふ。これらの被爆樹は早く個々に調査して記録を残し、原爆天然記念物として保存することが必要だと思ふ。少くとも被爆樹木を保護し、それぞれの天寿を全うさせるような措置が望ましい。

(名古屋大学農学部教授)